寄稿

石桜生れのもの書きたち

伊五沢富雄（新2回生）

同級である編集委員SO君より長い電話で一筆書けと言われたので、標記のようなテーマで、資料集めなど始めていた。そんな所へ、記念誌発行の分厚い書き物が送られてきた。見ると、私が資料集めをしていた、秋浜悟史、村上昭夫、高橋克彦の三氏の分は、すでに編集の中に入っており（第二章活躍する先輩群像、第三章学園をめぐる人物像）、名前まで明示されていたので、その人たちの分は除外して、その他の人を書いてみる。

その一、佐々木京一　新一回生

①「一揆の奔流」一九八四（昭五九）八・二五発行、東京千代田区民衆社、二千円　三五七ページ。

②「一揆の激流」一九九三（平五）一二・十民衆社、二千五百円、三一五ページ。

③「南部盛岡藩の権力闘争」一九九五（平七）一・一〇、国書刊行会、二千八百円、二八七ページ。

以上の三部作により、平成七年、法政大学、

森嘉兵衛賞を受賞する。その年、出版祝と受賞祝を併せ、記念パーティーが盛岡会館にて開催された。

氏は、岩泉町岩泉中野四二―七に生れ、岩泉小学校卒後、岩手中に入学し、岩手高を一九四九（昭二四）に卒業し、学習院大国文科に進んだが二年後事情あって中退し、地元の岩泉中学校の助教諭となる。助教諭をしながら法政大学の通信教育を受け日本文学科を卒業し、正職員の資格を取得。小川中学校教員。以後、高校教員となり、小川分校、小本分校岩泉高、盛岡農、田野畑分校（高）小本分校岩泉高、杜陵高、小川分校と歩き、そこを最後に、平成元年三月に定年退職し、平成四年、岩泉民間伝承研究会々長として、地方史（一揆）の研究に全力をかたむける。

一冊目の「奔流」は教員在職中の力作であったようだ。

二冊目の「激流」の終わりに、こう記している。

「本書（激流）を第一部とし、前著「奔流」を第二部とし、第三部は嘉永六年三閉伊一揆の民間伝承と記録「一揆の奔濤」（仮題）とする三部作の構想があったからである」と。

三冊目「一揆の奔濤」（仮題）は「南部盛岡藩の権力闘争」となって出版され、それがみごと歴史大賞に輝いたのであった。

その二、伊五沢富雄　新二回生

①「啄木と渋民の人々」一九九三（平五）三二〇、東京文京区近代文芸社、千六百円二七二ページ。

②「啄木の里よりの発信」一九九四（平六）二・二〇、盛岡タイムス社、千八百円、三一六ページ。

③一九九六（平八）一・七より「日本一の代用教員」現在盛岡タイムスに連載中。

①は一八年間、渋民在住時代に啄木とかかわりのあった渋民人（一五人ばかり）についての研究であり、

②は渋民の地よりの発信で、全国誌、地方誌などに書いた小論文、エッセイをまとめたもの。両者とも、日本図書館協議会の推せん図書に選定されたが、売れ行きには、あまり関係が無かったようだ。

その三　中村嘉明　岩高教員

①「第六感はダーメン」一九六六

②「たかが一匹の蝿」一九九五（平七）二・二〇、千五百円、三三六ページ。

教え子、克彦氏が推せんする本だ。